

ある日、僕は不思議な体験をした。それは夏の暑い日のこと。僕はなんでそんな体験をしたのかは正直わからない。でもただ一つ言えること、それは、人は、たった一つの出来事で変わってしまう。でも、裏を返せば、たった一つの出来事で自分を自分で変えることができるってこと――。

僕の名前は、林 颯太。両親が交通事故で他界して、今は長野にあるおばあちゃんの家を引き取られて、その公立中学に通う二年生。

僕の家族の話をする、兄弟はおらず、両親はIT企業に勤めている。二人とも共働きで、夜遅く帰ってくる人が多い。夏休みも仕事があつて、家族で旅行に行ったり、ショッピングモールに行ったりといった思い出がなく、寂しく感じることはあつたが、それでも早く帰れた時の両親は、僕の好物のオムライスを作ってくれたり、誕生日はちゃんと祝ってくれたり、忙しい中でもちゃんと僕のことを考えてくれていたので、そんなに気にすることはなかった。

父は、とても厳しい人だった。門限や、生活態度にとっても厳しく、僕もしょっちゅう家のお仕置き部屋で怒られていた。僕がいいことをするとちゃんと褒めてくれるし、悲しくて泣いてるときは背中をさすってくれるし、厳しい中にもちゃんと愛情がある人だ。

母は、おてんばで心配性。おまけに、「はまったこと」にすぐ飽きちゃう「飽き性」だ。この前買ったダイエットグッズだって、三日で押入れ行きだ。僕に行事があるときには、十回ぐらい「忘れ物がないか？」と聞いてきて、「うるさいな」と思うことはあるけれど、それも母の優しさなんだなっていうのも思っている。

僕は、中学受験をした。都内にある有名私立中学校に入りたくて、小学四年生の夏から、有名塾に週三回通っていた。その中学校には見事合格することができ、大変なことはたくさんあったが、それを忘れるほど嬉しかった。

入学式前日は、楽しみすぎて眠れなかった。「明日友達ができるかな、先生はどんな人かな。」とかを考えると止まらなくて、これからまた始まる中学校生活に思いを馳せていた。

その中学校の入学式の日、僕の両親は死んだ。その日、前日会社でトラブルがあり、夜帰ってこられなかった両親は、会社から直接車でその中学校の入学式に来ることになった。僕の話は、前日から僕の家泊まっていた長野のおじいちゃんおばあちゃんが、面倒を見てくれて、入学式にも付き添いをしてもらうことになった。

入学式当日――

両親から電話がかかってきた。

「颯太！いよいよ入学式だな！颯太の入学式楽しみだな。お前はここまでよく頑張った。偉いぞ颯太。それとごめんな。家に帰れなくて。それと、周りの人に迷惑をかけるようなことは絶対にしないこと。」

「ありがとう！全然いいんだ！父さんたちがたくさん働いてくれたおかげで、僕はこうやって暮らせてるんだから！。こうやって、入学できたのも父さんたちのおかげだよ、分かってる！。礼儀正しく、周りの人に迷惑かけないように、でしょ！」

「そんなことより颯太、ちゃんと入学式に必要なものは持ったの？母さんたちは忘れ物は届けられないわよ！」

「もう、いい話してるのに、心配性だな、母さんは。大丈夫！昨日おばあちゃんたちと確認したんだ！母さんもここまでありがとう！」

「そう？ならいいんだけど、私は何もしてないわ！颯太の努力だよ。本当にお疲れ様。」

これが、僕が両親と交わした最後の会話だった。入学式中、両親の姿が見えなかったのでおかしいなと思ったのでおばあちゃんに聞いたら、両親の車が大型トラックに追突されたということだった。両親は即死で、救急車が来た時にはもう手遅れだったらしい。

「まさか、今朝まで話していた両親が死ぬなんて、。」僕は驚き、頭が真っ白になった。同時に、とんでもない悲しみが襲ってきた。大好きだった父さんと母さんの突然の死、その出来事が僕を一気に変えることとなった――。

その後は、色々忙しくあまり記憶にはないが、両親の葬儀を身内で終え、僕たちの住んでいた家を売り、僕はいく予定だった中学校には通えず、おばあちゃんの家へと引き取られた。

僕が通うことになった学校は、長野の中でも田舎の方にある学校で、スポーツに長けてるわけでも、勉強に長けてるわけでもない。生徒数はそれなりにいて、行事もそれなりにある、ごく普通の公立中学だった。

この頃の僕といえば、両親の死が影響し、以前のように明るく活発だった性格は打って変わり、暗く軽度の引きこもりのようになっていた。部活は帰宅部に所属した。

「東京から来ました。林 颯太です。宜しくお願いします。」  
普通だったら、

「東京から来たの！？凄いい！」とか、  
「東京って有名人いっぱいいるの！？」

とかのはずだろう。しかし、僕に飛んできた言葉は、

「だーれ、あの汚い人〜」(笑)

「あいつ、ぜってーくせえよな、仲良くしたくないわ。」(笑)

といった言葉ばかりだった。それもそのはず。挨拶した時の僕の、髪は放置された雑草のように汚く伸びていて、制服のシャツが出た荒れ果てた姿になっていたからだ。

そんな身なりの僕に誰も近づくわけがなくて、友達は一人もいな

かった。勉強の方も全然ダメで、提出物は一切出さないし、定期テストも中の下。先生にも呆れられた。そんなわけで僕は、誰ともかわりを持つことなく、ただ学校にいるだけだった。面白味もない、めんどくさい喧嘩もない、そんな学校生活を送っていたのだ。僕も僕で、自分を変えたいとも思わず、このまま何事もなく、生活できればいいなと思っていた。そんなことを思いながら過ごして気がついたら、季節は夏が始まるうとしていた。この頃から、僕の学校生活は大きく変わる事となった。

「行ってきます。」

「気を付けるんじゃぞ。」

「はい。」

その日は日が照っていて暑かった。いつものように学校に来て靴箱を開けたら、そこには、紙屑がたくさん詰まっていた。僕はその瞬間とつさに三文字の言葉が浮かんだ。「いじめ」という言葉だった。よく、ニュースでいじめられた中学生が、学校の屋上から自殺したなんてニュースをやっているけれど、「原因になったいじめとは、こういうものなんだ。」と少し知った気がした。

しかし、よく考えれば下駄箱に紙くずを入られただけで、僕は面と向かって暴言を吐かれたわけでも、体に危害を加えられたわけでもない。だから特に気にせずその紙くずをごみ箱に捨て、教室へと向かった。

担任の棚岡先生が教室に入ってきた。

「気を付け。礼。これから朝礼を始めるぞ。早速だが、夏休み中に開催される体育祭に向けて、男子一人、女子一人の体育祭実行委員を決めたいと思う。誰か立候補する奴いるか？」

体育祭は夏休みにあるため、実行委員になると体育祭までの夏休み期間を準備に費やさなくてはならない。みんな口々に

「えー、めんどくさい。」

「やっぱ夏休みはあそばなきやだよね。」

と言っている。

「僕だって、友達いなくて遊ぶ予定はないけれど、学校行事に時間を費やすのは嫌だ。」そう思っていた時、

「先生―。僕は、林君が体育祭実行委員がいいと思います。」

そういったのは、クラスの人気者、斎藤 翼だった。斎藤はサッカー部にいて、整った顔立ちにスタイルのいい体で、おまけに面白くて頭がいい。学校ではまさにモテ男的存在だった。

「賛成―！ちなみに、女子の体育祭実行委員は、金谷さんがいいと思います―！」

斎藤に続けてそう言ったのは、赤森 花。赤森も学校の中で群を抜いて美人で、しゃべり上手である。こちらもクラスの人気者であった。

僕はふと、「さっき下駄箱に紙くずが入っていたことと、この体育祭実行委員決めとは関連している。」と考えた。途端にすごく怖くなってきた。

「だれか不満があるものいるか―？、よし、じゃあ体育祭実行委員 男子は林 颯太、女子は金谷 智子で決まり。では、朝礼を終わります。」

いつの間にか決定され、「仕方ない。」と思つて、席を立った途端、「ざまあみろ。」

そうつぶやいたのは斎藤 翼だった。

「お前の居場所は、ここじゃない。」

クラスメイトも、くすくす笑ったり、なにかこそこそと話している。その時、僕の頭に固いものが当たって鈍い音がした。そして気が付いたら、保健室のベットの上で寝ていた。

「大丈夫？」

そう僕に訪ねてきたのは、同じ体育祭実行委員の金谷さんだった。同時に、僕は自分の身に何があったのか一瞬のうちに理解した。多分、あの斎藤が僕のことを殴ったのだろう。

「大丈夫だよ、そういう金谷さんは勝手に実行委員にされてたけど、大丈夫なの？」

「私はいいの。ずっとこうだから。」

そう言つて彼女は切なげな表情を見せた。わけを聞くと、彼女は入学当時からクラスメイトの赤森率いる女子たちにいじめられているらしい。同じ境遇の人がいることを知つて、心に光が差し込んだ気がした。

それからは、僕たちへの「いじめ」は、もっと激しいものへと変わつていった。体育倉庫に閉じ込めたり、トイレの水を頭からかけられたり。それでも僕たちは耐えた。

そして夏休みがやってきた。僕は金谷さんとは少しづつ仲良くなり、体育祭の準備も、苦だとは思えたがそこまでもなかつた。そして無事に体育祭が終わり、ようやく僕に、平和な夏休みが来た。

ある日、僕はおばあちゃんの家縁側に座つていた。近くには小川が流れ、虫の音がたくさん聞こえて、とても居心地のいい場所だった。ふと、眠くなつて僕は寝てしまった。

「起きて。颯太。起きて。」

「せっかく寝てるのになんだよ、。」と思ひながら起きると、そこには死んだはずの僕の両親がいた。

「父さん！！母さん！！」

僕は叫んだ。泣いて叫んだ。そして、二人の胸元へと飛び込んだ。

「颯太！勝手にいなくなつてごめんな。」

「颯太だけを置いて私たちがこの世を去るなんて、ほんとうに申し訳ないことをしたわ。ごめんなさい。」

「謝らないで！もういいんだ！これから僕とまた楽しく三人で暮らそうよ！」

すると、両親の顔が曇つた。

「ごめんな颯太。俺たちはもう死んでいる。だから、これからまた颯太と暮らすことはできない。今は、神様から時間をもらつてるんだ。少しだけ、颯太に会わせてくれとお願いしてね。」

悲しかった。「やっぱり父さんたちと暮らすことはできない。」とわかると、やっぱり悲しくて泣いた。その背中を父さんと母さんは

優しくさすってくれた。

それから僕たち家族はとても楽しい時間を過ごした。三人で一緒にご飯を作って食べて、温泉旅行にも行った。最後に記念写真を撮った。

「ごめんね。颯太。もう帰らなきゃいけない時間なの。」

「そんな。」

楽しい時間は本当にあつという間で、「別れの時間がとうとう来たんだな」と思った。僕の脳裏に自分がいじめられていることがよぎった。もう辛くて、どうしようもなかった。誰にも言えなかったから、ここで言うしかなかった。

「父さん。母さん。僕、いじめられてるんだ。」

僕は思い切ってそう告白した。すると、途端に涙があふれてきた。今まで誰にも言えなくて、ずっと自分で抱えてきたそれを初めて人に言えた今、抱えていた不安とか辛さとかから、一気に解放されたんだと思う。

「そうか。そうか。ごめんね、颯太。俺たちがそんな悲しい思いをさせたんだよな。」

「ごめんなさい。何にも助けてあげられなくて、お母さんなのに、全然支えになれなくて。」

僕は泣いた。思いつきり泣いた。父さんと母さんも一緒に泣いた。ずっとずっと背中をさすり続けてくれてずっと泣いた――。

そして、とうとう別れの時になってしまった。僕は、父さんと母さんからさつき撮った家族写真をもらった。

「颯太。俺たちはいなくなるけど、この写真は残る。辛くなったらここにいるお父さんとお母さんに話しなさい。俺たちは空の上からずっとお前のことを見て応援をしている。ずっとずっと味方だよ。それともう一つ、怖くなったり辛くなったりしたら、『アオゾラ』と天に向かって叫びなさい。そしたらまた、助けてあげるからね。」

その言葉に僕は勇気をもらった気がした。もう僕は負けない。その心に誓った。

「颯太！！颯太君起きて！」

ハッ！今度はほんとに起きた。目の前には小川があり、現実に戻ったことが分かった。でも、右手には写真がちゃんと残っていて、さつき体験した出来事が嘘ではないことを証明していた。

新学期当日――

朝、金谷さんと会って、「おはよう。」とあいさつを交わした。そこへ、齋藤率いる僕たちをいじめてるやつらが来て、

「お前らをまたいじめられるなんて光栄だぜ。」

と言ってきた。

でも僕はもう負けないと決めた。

「望むところだ。かかってこい！！」

そう齋藤たちに吐き捨てて、金谷さんの手を引いて屋上まで来た。

「さつきの林君、かっこよかった。」

そう言われてなんだか照れくさくて、鼻をこすった。

「アオゾラ――だよ。」

「アオゾラ？」

「怖くなった時のおまじないなんだ。死んだ父さんと母さんが教えてくれた。怖くなったり、辛くなったりしたらこう叫ぶんだ。」

それから二人で

「アオゾラなんて言わないぞー！」

と叫んで、目を合わせて思いつきり笑った。

もう僕は負けない。僕には父さんと母さん、金谷さんだって、たくさんいるんだ。

そして、心でこう言った。「父さん、母さん、僕、強くなる。そして強くなった姿をまた見せに行くね。」天にいる父さんと母さんも微笑んでいるような気がした。これが僕の夏の日の不思議な出来事。



今、辛くて悩んでいたり、苦しくてどうしようもない人はいま  
せんか？でも大丈夫。あなたがどこにいても、「あなたの味方になって、  
助けてくれる誰か」は絶対にいます。安心してください。  
そして、一緒に強くなりましょうね。